

困難を抱えた子どもたちの SOS に応える-不登校対策の新たな展望の試み-

◎加瀬 進（東京学芸大学社会科学講座社会福祉分野）

○佐藤牧子（東京学芸大学附属小金井小学校）

藤野 博（東京学芸大学教職大学院特別支援教育高度化プログラム）

小林晋平（東京学芸大学基礎自然科学講座物理科学分野）

鈴木秀樹（東京学芸大学附属小金井小学校）

宮下佳子（東京学芸大学こどもの学び困難支援センター）

代表者連絡先：skase@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】 不登校対策、個別最適な学び、学習評価

1 はじめに

令和5年度の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」では、小・中学校における不登校児童生徒数は約346,482人と前年度から47,434人（15.9%）増加し、過去最多となった。児童たちを取り巻く環境が変化する中で、不安や悩みを相談できていない児童たちがいる可能性や、児童たちの不安や悩みが従来とは異なる形で現れたり、一人で抱え込んだりしている可能性等も考慮し、児童たちの小さなSOSを見逃さず「チーム学校」で素早く支援するとともに、教育と福祉等が連携しつつ、児童やその保護者が必要な時に支援が行われる体制整備が求められている。個々に寄り添った学びの場の整備、および学習方法や評価手法については前例が少なく、支援の事例や工夫を示すことは喫緊の課題である。そこで本研究では、不登校施策に関して前例となる事例や評価等手法を示し、積極的に情報発信を行う。

2 本プロジェクトの実施

(1) 不登校や登校しぶりにある児童の学びの場および学習方法に関連する事例の検証

①個別支援計画の作成：A小学校で不登校または別室登校などで教室での授業を受けるのが困難な児童の個別の支援計画を作成した。作成にあたり各種心理検査結果や医療機関や相談機関等からの助言及び保護者および児童へのヒアリングも含めて学校生活などの課題と学習環境の調整を行なった。保護者から児童へ、教室での学習への参加が求められていたが、児童からは、教室での一斉授業に合わせた学習に対して不安や意欲の低下が見られ、学習環境（場所）の問題が明らかになった。児童が安心できる環境や学習方法を経験して模索する中で、教室での部分参加、学校内の別室（保健室やリソースルーム等）、（学校外）オンライン授業や適応指導教室の利用の希望が挙げられた。また、その日の希望で柔軟に過ごす場所を調整できること、さらに学校内では学習支援員（大学生や大学院生）による学習やコミュニケーションサポートが求められた。

②個別学習活動の実践：学校の教育過程に沿ったカリキュラムでは、興味関心がないものへの意

欲が低く、また在籍クラスの進度に合わせることへの不安が見られた。そのため個々に興味関心のある教科や領域からアプローチをすることで、個々のペースで取り組むことから、学習へのポジティブな反応が見られた。また学習の困難さに対して ICT の活用で苦手を代替して学習に参加するきっかけを見出した。

a. 農作物の栽培と加工：植物の成長や収穫が目に見えた目標となり、登校のきっかけとなった。収穫した農作物で調理したいものを計画したりするなどの活動から、理科の植物に関する内容へ接続した。

b. 興味関心から取り組む（外部）講師を活用した学習：

1) 理科の実験：体育館にある運動機器等を用いて、大型の振り子装置などを設置し、振り子の規則性、再現性へ接続した学習を行なった。

2) 調理を介した理科や算数の学習では、料理研究家を講師として、家庭科室で少人数の料理教室を開催した。人数が少ないので、一人ですべての調理や後片付けを行った。講師によるデモンストレーションを経て、一人ずつ調理をした。調理過程で質問し、一人では難しい作業を他者に手伝ってもらおう声をかけたり、自分の苦手な食材を取り入れたり、普段の生活では自ら行うことが困難な行動へとつながった。また、調理体験の達成感が自信となり、家庭で再度調理をしたり、調理したものを友達に食べてもらったり、家庭で家事の手伝いをするなどの変容も見られた。また、高学年では家庭科、中学年では理科や算数の関連する内容を学習する姿も見られた。

3) プログラミングによるロボット操作を介し、児童の心理的負担を軽減し、協働的な学びを行えるための学習を行った。プログラム作成は個人でスタートしたが、プログラムを作成する中で、児童同士のプログラムを見たり、体験したりする中で、完成したプログラムは、個人で完結できるが、作成したプログラムを基に他者に紹介したり、体験し合ったりすることで協働的なかわりが見られた。また高度なプログラミング言語も設定されているので、関心が高い児童は、自分で英語の意味などを調べ、プログラミングを深く学ぶきっかけとなった。児童は（やらされている、勉強しなければいけないという様な）心理的負担を感じることなく協働的な学びを行った。

c. ICT を活用した学習支援：デジタルツールを用いたノートの記録や学習資料の作成、学習した内容の定着を図るためにオンラインクイズの作成をしながら、記憶する流れができた。書字の苦手さを抱える児童にとって、負担を少なく学習に参加できる環境が整備された。また、メタバース空間における個別学習では、対面でのコミュニケーションが困難であった児童が、アバターを通じて徐々に関わる人を増やし、海外英語圏在住の教員 OB との交流から、英語学習へと発展した。AI を活用した学習では、教師が伴走者として生成 AI を活用することで、児童は探究的な学習を進め、他児童と協働的に学ぶきっかけとなった。

③教育課程への位置づけ：対象となる児童の状況に応じて、個別の指導計画を作成し、オンライン授業、別室での個別学習、メタバース空間、野外での活動等を教育課程に位置づけ、学習活動および評価の検討を行った。評価の一例を表 1、2 に示す。

表1 個別の教育課程及び評価①

教科等	単元名	教科活動における困難さ	代替活動	手立て(支援の内容+特異な才能の伸長)	評価
特別活動・学級活動	話し合い・学習や生活に関する活動	口頭でのやりとりが難しい	メタバースでの、チャットを用いた話し合い	・メタバースでの養護教諭との話し合い	A 自己理解(得意・苦手、コミュニケーションの取り方を伝えることができた。
				・安心してできるコミュニケーションの方法について、体験しながら話し合う。	A チャットだけでなく、音声で話すことができた。
特別活動・学級活動	話し合い・学習や生活に関する活動	メタバースでの話し合い	自己理解(得意・苦手、コミュニケーションの取り方を伝えることができた。	自己理解(得意・苦手、コミュニケーションの取り方を伝えることができた。	A 自己理解(得意・苦手、コミュニケーションの取り方を伝えることができた。
総合的な学習の時間	キャリア教育	自分の意見を言葉で伝えることが難しい。	メタバースでの話し合い	メタバースで、養護教諭と学生支援員との話し合い(キャリア教育)、中学校進学に向けた過ごし方について話し合う。	A 自分の強みや困りを表現することができた。
英語	好きなものや宝物などについて紹介し合おう①	自分の意見を言葉で伝えることが難しい。	メタバースでの学習自己紹介(5年時の復習)	養護教諭、英語を担当する教員とのコミュニケーション。英語で自己紹介をする。分からない単語は、指導者に聞く。	A 表現・語彙を適切に選び安定して使うことができた
英語	好きなものや宝物などについて紹介し合おう②		メタバースでの学習やり取り/発表/聞く・読む(好きなもの紹介)	養護教諭、楽手支援員と、自分の好きなものを紹介する。	A 表現・語彙(新しい単語を調べ)を適切に選び安定して使うことができた
体育	体づくり運動		体力が低下しており、長時間の運動は難しい。 自分の意見を言葉で伝えることが難しい。	フリースクール近隣の公園で、鬼ごっこをした。	時間を短く、活動範囲をい動ける範囲に限定して実施した。
英語	日常生活について紹介し合おう	自分の意見を言葉で伝えることが難しい。	カナダのハロウィンについて知る	実際のカナダのハロウィンについて、写真や動画から、気になることを調べるよう促した。	A カナダのハロウィンのと日本のイベントを比べ、違いに気づき表現することができた。
英語	世界の行きたい国について	自分の意見を言葉で伝えることが難しい。	メタバース上でカナダの好きな場所やその理由について、まとめて発表しよう	「赤毛のアン」を手掛かりに、カナダの好きな場所について、調べる。また、家庭学習で取り組んだ過去分詞形の日常での使い分けについて具体例を出して、理解できるようにする。	A 自分が取り組みたい学習内容に取り組むことができた
英語	好きなものや宝物などについて紹介し合おう③		好きなスイーツについて、日本語と英語の表現の違いを調べて、ビンゴゲームをする	シュークリームはカナダではPoffinと表現が違うことを知り、他のスイーツでも表現の違いがあるものを調べ、ビンゴにした。	A 好きなものについての学習では、日本語と英語の表現の違いに気づき、スイーツの呼び方を調べて活動に生かした。英語の表現を聞いた使ったりしながら、楽しんでやり取りを行っていた。

表2 個別の教育課程及び評価②

活動	教科等	単元名	到達目標	学習活動	知識技能	思考判断表現等	主体的態度	教科活動における困難さ	手立て(支援の内容+特異な才能の伸長)	評価
調理(ビーナッツバタークッキー)	理科	ものの温まり方とよ	・加熱の条件(時間・温度・厚み)をの条件を変えて結果を比べ、条件と結果の関係を説明できる。 ・観察の着眼(焼き色・香り・食感)を言語化し、次の改善案を立てられる。	ビーナッツバター作りで、大きさ、厚みの条件を変えて、結果を比較することができる	加熱条件を適切に設定・記録し、観察結果を比較して示せる。	条件の違いが結果に及ぼす影響を説明し、妥当な改善を述べる。	記録方法を工夫し、次の試行に活かす。	手順がわからない、見通しが持てない不安が高まる	・調理のデモを通して、見通しを持たせる ・温度や時間の調節から、自分の好みの焼き加減を探る	温度と時間の記録をもとに焼き色の差を説明できた。
		算数	重さ・体積の測定/時間管理	材料の分量・加熱時間を正確に扱い、記録を基に判断できる。	分量計測→時間管理→出来上がり評価と対応づけ。	測定・記録が概ね正確である。	時間管理(加熱時間など)と合わせて、条件(量・時間)と結果の関係を読み取る。	目盛の読み、ゼロ点合わせ、単位の選択を自分からする。		単位選択・ゼロ点・目盛読みを正確にできた。
	国語	話す・聞く	聞き手や目的に合わせて、発表や話し合いの内容を要点→理由・具体例→まとめの順でわかりやすく伝えることができる	レシピと調理のデモ・ストレーションを基に手順、要点、質問、理由を説明することができる。	材料→手順→注意→コツの要点を短く言える	自分の考えに理由(事実・体験・資料)を添えて説明できる	ふり返りを踏まえ、次回に向けた改善点を自ら設定できる			調理で上手にできたことを表現できた。

3 成果と課題

(1) 学びの場の多様化と児童の変容

メタバース空間の活用により、対面でのコミュニケーションが困難であった児童が、アバターを通じて徐々に関わる人を増やし、海外在住の教員 OB との交流から英語学習へと発展した。児童が「大丈夫だった」「こうしてみたい」という経験を積み重ねることで、教室復帰を目標としない段階的支援の有効性が確認された。

(2) 生成 AI を活用した個別最適な学びと率直な思いの言語化

教師が伴走者として生成 AI を活用することで、児童は探究的な学習を進め、他児童と協働的に学ぶきっかけとなった。また、個別相談では、チャット上で児童の率直な思いが言語化され、対人では見えにくい感情に寄り添う新たな支援手法となった。児童は生成 AI に対して冷静な態度を養いながら、問題解決の道具として効果的に活用する素地となった。こうした実践については、2025 年 11 月 22 日に ICT×インクルーシブ教育セミナーとして開催し（申し込み 250 人）、公開授業及び講演等を実施し、教育関係者への普及のきっかけとなり、教育委員会や公立学校等から研修の依頼等へつながった。今後は生成 AI 活用の事例集やオンラインコンテンツを作成したり、公開授業を核とした教員研修を実施したりして、公立学校等へ普及する。

(3) 体験的活動を通じた協働的な学びと達成感・自信の獲得

理科の実験、ロボット・プログラミング、料理教室等の体験的活動により、興味関心の幅が狭かった児童が、個人の興味から出発して協働的な学びへと自然に移行した。料理教室では、一人で全調理過程を体験することで達成感や自信を得て、家庭での再調理や手伝いや理科や算数等の学習につながるなどの行動変容も見られた。今後は児童の興味関心から学習への接続だけでなく、継続した学びとなるような仕組みを検討していく。

(4) 教育課程への位置づけと評価の実践

異学年での活動を、児童の状況に応じて個別に教育課程に位置づけた。料理教室では高学年は家庭科、中学年は算数や理科の単元として評価するなど、探究的・体験的学びを各教科の学習として位置づける評価方法を実践できた。課題として、探究的な学びをどのように各教科の評価に反映させるかの整理する必要がある。今後、多様な学びの場における学習の評価に生成 AI を活用したシステムによってある程度、自動化することで、教師の負担を増やすことなく特定分野に特異な才能のある児童に対して適切な評価ができる仕組みの構築を進める。